

# 若宮ノ東遺跡Ⅲ

都市計画道路高知南国線建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ

2025.1

高 知 県

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

### 3. 若宮ノ東遺跡出土の刻書土器

#### (1)はじめに

若宮ノ東遺跡からは文字(漢字)が刻まれた可能性がある土器片が5点出土している。これらの土器片は後述するように概ね弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてのものとみられる。その重要性に鑑みて発見当初より平川南先生をはじめ多くの先生方に積読を依頼してきたものの、類例が皆無のなかでの積読は困難を極めた。検討会を継続的に開催し、積読にあたり様々な視点からのアプローチを試みてきた。これらの検討を踏まえ、土器自体の観察所見とともに現時点での積読案等の成果を本小文に記述するにあたり、平川南先生・李成市先生・川尻秋生先生・田中史生先生に改めて実見していただき、コメントを頂いた。

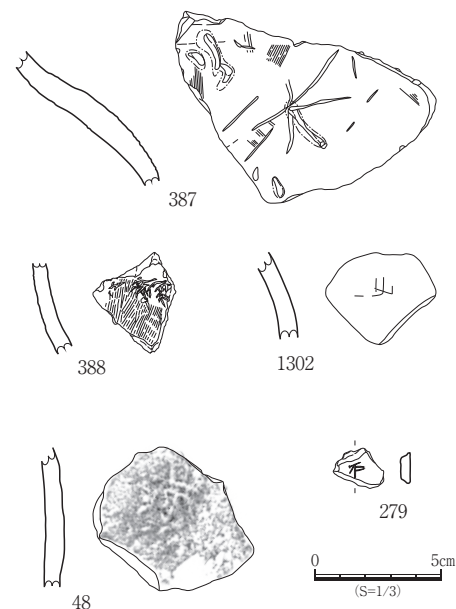
#### (2)刻書土器の観察所見

##### ①『若宮ノ東遺跡Ⅱ』\_387

5区SX2から出土したものである<sup>(1)</sup>。SX2は5棟の竪穴建物跡が重複している。どの竪穴建物跡に帰属していたものかは判然としないものの、ST8あるいはST9の可能性はある。土器片は弥生土器の壺の頸部から肩部にかけての破片である。外面はナデ調整あるいはヘラミガキ調整を丁寧に施されているからか、あるいは摩耗によるものか調整の観察は難しい。一方、内面の調整は明瞭に観察できる。断面はローリングを受けている。外面に二文字の刻書がみられる。両者では、線の太さや断面形状が異なっているものの、同一工具によるもので器面への当て方の違いによると考えられる。両者とも、払い・留めを意識しているように見受けられる。両者とも刻まれて凹んだ部分はミガキ状となっている。線のエッジに乱れがみられないことと線の縁が僅かに土手状に盛り上がっていること等から焼成前に刻書されたと判断できる。上の文字については全体は残存していない。ただ、刻書部位が頸部の屈曲が強く反りかえる部位であることから刻みづらく、文字の上端にちかいと推測される。また、文字自体は壺を正位に置いて右下がり斜めに刻まれており、左上には若干のスペースがある。左右にもスペースがあり、続く可能性もある。最大文字数を推定するため、土器片の形状・大きさから同タイプの壺とみられる実測図に当破片の傾きを調整して重ね合わせた(図717)。破片から推定した体部の大きさでは上述した2文字を含め、最大で7文字と推定できる。

##### ②『若宮ノ東遺跡Ⅱ』\_388

5区SX2の検出時に出土したものであり<sup>(1)</sup>、帰属遺構を特定することは387よりもさらに困難である。破片は弥生土器の壺の頸部の破片である。内外面、破断面ともにローリングは受けていない。刻まれているものが文字であると仮定すると複数文字が刻まれている



図版出典 (転載・一部加工)  
387・388:『若宮ノ東遺跡Ⅱ』  
1302・48・279:『若宮ノ東遺跡Ⅲ』

図716 若宮ノ東遺跡出土の文字が刻まれた可能性のある土器片

るとみられる。土器片の形状・大きさから同タイプの壺とみられる実測図に当破片の傾きを調整して重ね合わせた(図717)。壺を正位に置いてほぼ水平に刻んでいること、縦約1cmであることから本来何文字刻まれていたかは推定すらできない。刻書は刃物状の鋭利な工具で刻まれており、すべて同じ工具を使用していると推測される。エッジに乱れがないことから焼成前に刻書された



図717 387・388 土器片位置図

と考えられる。文字が集中する部分にはハケメはみられないことから刻書するにあたり、ハケメをナデ消し器面を平滑に調整し、刻みやすくしたとも考えられる。

③『若宮ノ東遺跡Ⅲ』\_1302

5区ST8から出土したものである<sup>(3)</sup>。細片の再確認中に新たにみつかったものである。弥生土器の壺の破片とみられる。内外面・破断面<sup>(4)</sup>ともにローリングを受けている。刻書は鋭利な刃物状、あるいは針状の工具で刻まれている。エッジに乱れがみられることから焼成後の刻書と推測される。

④『若宮ノ東遺跡Ⅲ』\_48

4区ST3から出土したものである。弥生土器の壺の体部か。器面は弱いローリングを受ける。外面の調整は粗雑であり、器面を平滑にするという意識は乏しい。線刻がみられたことから拓本を取った結果、文字が刻まれているように見えた。ただ、拓本と実物を比べて観察しても判然とせず、器面の凹凸が拓本により際立ったものか。焼成前にヘラ状工具を器面に対して寝かせて施している。

⑤『若宮ノ東遺跡Ⅲ』\_279

4区P207(ピット)から出土したものである。弥生土器の鉢の体部の破片か。ローリングは受けていない。内面に水銀朱が付着し、同じく内面に刻書されている。鋭利な刃物状の工具で刻書されている。エッジに乱れがないことから焼成前に線刻され

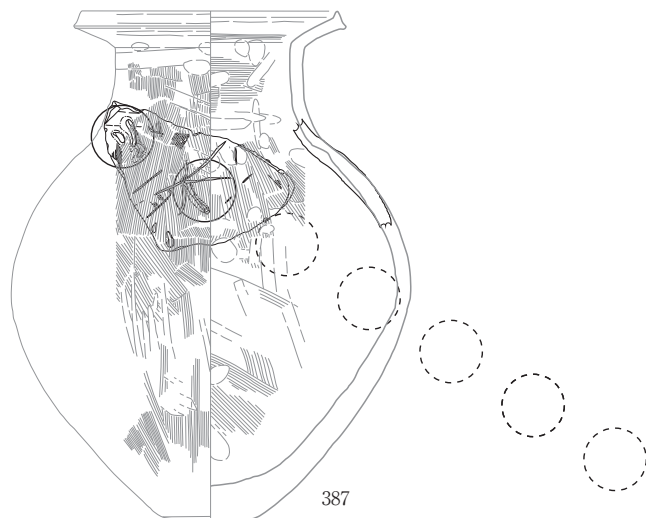


図718 387 文字数の推定図

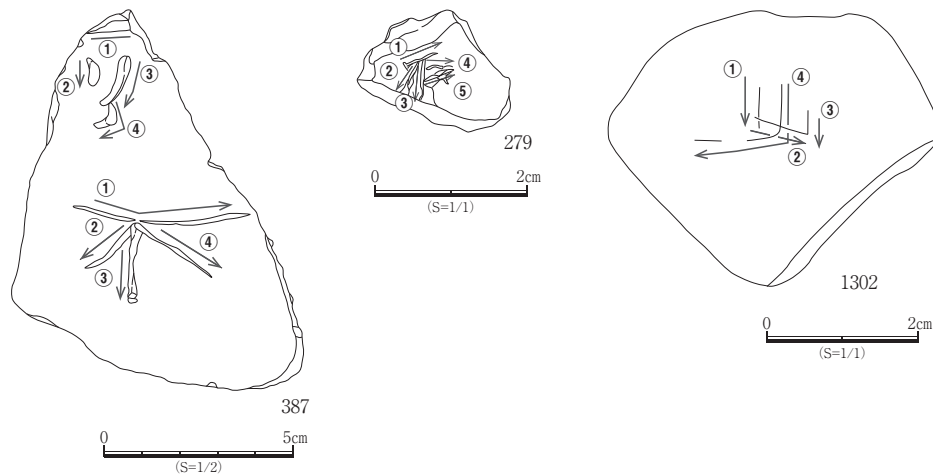


図719 279・387・1302 筆順案

たと考えられる。刻書自体は小さいものの、入り・払いのような部分がみられる。土器の破片自体が小さく他にも刻まれていたかは不明である。また、刻書内には水銀朱は付着していない。水銀朱は内面全面に塗られたものではなく付着したものと考えられる。P207からは図示した279以外に弥生土器片が27点出土している<sup>(5)</sup>。これらの土器片は概ね弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてのものとみられる。

### (3)コメント

釈読案を提示できたものは①『若宮ノ東遺跡Ⅱ』\_387と③『若宮ノ東遺跡Ⅲ』\_1302である。これら以外のものは現段階では保留とせざるを得ない。①『若宮ノ東遺跡Ⅱ』\_387は二文字が刻書されたものとみられ、上から一文字目は『何』か、二文字目は『不』か。図示したように『不』かの書き順には矛盾は認められない。③『若宮ノ東遺跡Ⅲ』\_1302は『中』(草)か。図示したように『中』かの書き順には矛盾は認められない。

### (4)土器の胎土について

図示した土器片の胎土は肉眼で観察する限り、在地のものによく似ているものの、それぞれの土器片は発色(色調)、素地、混和材の種類・量に違いがみられる。これらの土器片が在地の土器か、搬入品かで評価・位置付けが大きく変わることから、その判断は慎重に行わなければならない、本小文では断定は避けたい。

### (5)相対年代について

弥生時代後期後葉(V-5様式)から古墳時代初頭(古式土師器I期)にかけての高知県の弥生土器の変遷は緩慢である。特に弥生時代後期末(第VI期)から古墳時代初頭(古式土師器I期)にかけてはその傾向が強く、たとえ完形土器であっても詳細な時期を決定することが難しいものもある。刻書された土器片はいずれも破片であり、土器片自体では詳細な時期を比定できないため、共伴遺物を考慮して、概ね弥生時代後期後葉から古墳時代初頭とした。

## 第7節 小結

### 注

- (1) 2023『若宮ノ東遺跡Ⅱ』高知県・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (2) 出原恵三 2000年「5土佐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社, 出原恵三 1990「第Ⅴ章考察3古墳時代」『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会
- (3) ST8はSX2内の竪穴建物跡の1棟である。
- (4) 破断面はブラシ痕か。
- (5) 土器片は最大で約7cm四方のもので, 産地不明の搬入土器が1点含まれている。

## 報告書抄録

| ふりがな                  | わかみやのひがしいせきさん   |                        |  |   |   |  |        |        |
|-----------------------|---|------------------------|--|---|---|--|--------|--------|
| 書名                    | 若宮ノ東遺跡Ⅲ   |                        |  |   |   |  |        |        |
| 副書名                   | 都市計画道路高知南国線建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ  |                        |  |   |   |  |        |        |
| シリーズ名                 | 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書   |                        |  |   |   |  |        |        |
| シリーズ番号                | 第161集   |                        |  |   |   |  |        |        |
| 編著者名                  | 久家隆芳, 綾部侑真, 下木千佳, 株式会社パレオラボ   |                        |  |   |   |  |        |        |
| 編集機関                  | (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  |                        |  |   |   |  |        |        |
| 所在地                   | 高知県南国市篠原1437-1  |                        |  |   |   |  |        |        |
| 発行年月日                 | 2025年1月16日  |                        |  |   |   |  |        |        |
| ふりがな<br>所収遺跡          | ふりがな<br>所在地   | コード                    |  | 北緯  | 東経  | 調査期間   | 調査面積   | 調査原因   |
|                       |   | 市町村                    | 遺跡番号   |   |   |  |        |        |
| わかみやのひがしいせき<br>若宮ノ東遺跡 | 〒783-0006<br>高知県<br>南国市<br>篠原   | 39204                  | 040181   | 33°<br>57'<br>59"   | 133°<br>63'<br>23"                              | 2018.9.25<br>～<br>2018.11.22<br>2019.5.7<br>～<br>2019.11.20<br>2020.5.7<br>～<br>2020.12.18 | 5,612㎡ | 記録保存調査 |
| 所収遺跡                  | 種別  | 主な時代                   | 主な遺構   |   | 主な遺物  |  | 特記事項   |        |
| 若宮ノ東遺跡                | 集落跡   | 弥生時代<br>古代<br>中世<br>近世 | 竪穴建物跡 31棟<br>掘立柱建物跡 160棟<br>柵列跡 32条<br>土坑 290基<br>土器棺墓 3基<br>溝跡 90条<br>井戸跡 9基<br>性格不明遺構<br>ピット | 弥生土器<br>土製品<br>石製品<br>鉄製品<br>土師器<br>須恵器<br>緑釉陶器<br>瓦器<br>瓦質土器<br>土師質土器<br>青磁<br>陶磁器 | 弥生時代の集落跡、古代の官衙関連遺構、中世後期～近世の溝で囲まれた屋敷群、土坑墓等を検出した。 |  |        |        |
| 要約                    | 弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての大規模集落跡、飛鳥時代～平安時代にかけての官衙関連遺構、中世前期の屋敷跡群、中世後期の溝で囲まれた屋敷群、近世の土坑墓・ハンダ土坑を検出している。以上のように若宮ノ東遺跡は長期間にわたり当地域における拠点的な位置を保持している。<br>本書は、平成30年度・令和元年度・令和2年度にかけて調査を実施した調査成果である。 |                        |  |   |   |  |        |        |

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第161集

## 若宮ノ東遺跡Ⅲ

都市計画道路高知南国線建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ

2025年1月16日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社